

13. 重症頭部外傷患者の意識障害に対する高気圧酸素治療の有用性

土田 隆 村本真人 野口洋三
(磯子脳神経外科病院脳神経外科)

【目的】来院時 Glasgow Coma Scale (GCS) 6以下の重症頭部外傷患者に於ける意識障害に対する、高気圧酸素治療の効果を、急性期の重度意識障害時と、幸いにして意識状態が(3-3-9度10以上に)回復を見たものの、軽度意識障害が遷延した状態に於て、非高気圧治療患者とその意識回復の推移を比較、検討して見た。

【方法】重症頭部外傷患者25例中急性期では高気圧酸素治療施行例5例。残り20例を対象群とし、回復後、軽度意識障害が3週間以上経過した12例中、7例に高気圧酸素治療施行、5例を対象群とした。意識障害の程度判定は、急性期重度意識障害時はGCSを用い遷延した軽度の意識障害では3-3-9度と当科で考案した指数を基にして判定した。

【結果】重症意識障害時は発症時の頭部外傷の重症度及び他臓器損傷の合併の度合、又高気圧酸素治療中の急変等のリスクの為、続行不能例等あり非施行群との有意差を明らかにすることは困難であったが、遷延した軽度意識障害患者に於ては非対象群に較べ、その回復に於て有用であることが認められた。

【結論と考察】重症頭部外傷急性期に於ては、全身の種々合併外傷や頭蓋内の傷害の程度によって予後を決定づけられてしまう部分も多く又施行可能な症例の絶対数も少なく、高気圧酸素治療の有用性に関して一致した結論を得られなかったが、遷延した軽度意識障害患者に於ては、その発動性、反応性、活気等の点でめざましい改善の認められる症例が多く、高気圧酸素治療の有用性を十分に認識させられた。しかし、こうした軽度の意識障害の程度判定として、現存する確立したクライテリアが無く、今回考案した判定基準をより確立したものとし、更に検討を続けて行く所存である。

14. 圧迫性脊髄障害に対する高気圧酸素療法の検討(第2報)障害度要因との関連について

吉田恒丸*¹⁾ 山崎典郎*¹⁾ 田中秀昭*¹⁾
森久保治道*¹⁾ 杉山弘行*²⁾ 神山喜一*³⁾

(*¹⁾都立荏原病院整形外科 *²⁾ 同 脳神経外科 *³⁾ 同 高圧酸素室)

【目的】圧迫性脊髄病変に起因する障害に対し、OHPを併用した症例経過を分析した結果、OHPは主治療による病態の緩解に協調する補助的効果や、待機段階期の支持療法としての適応があることなど前回の本学会で発表した。しかしながらその成績は年齢、罹病期間、障害度、狭窄率等の要因に制約され多様である。このうち今回特に障害度の要因をとりあげ、保存的治療またはリハビリテーション促進に向けてのOHP効果や限界を検討することにした。

【方法】頸髄障害のみ40例を対象とし、各症例経過でOHPを併用した手術的治療期、保存治療期、リハ主体の待機期を設定し、各々A、B、C群とした。このうちB、C群について、日整えスコアより算出した改善率を指標に、病型(服部分類)、障害度と、OHP効果の関連につき、OHP非施行の経過観察期であるD群を対照として比較した。またOHPの体験評価を点数化(8点満点)して参考にした。

【結果】1)平均改善率は3型病型についてA、B、C群の順に低下する(35%、25%、14%)。2)中、軽度障害例についてB、C群間に平均改善率の差は少ない(34%、32%)、3)中、軽度障害例の2型病型ではC群の平均改善率が50%と比較的良好。4)OHPの体験評価点と改善率は相関しないが、中、軽度障害例で3点以上の体験評価点がある場合の平均改善率は、B群37%、C群20%であった。5)D群は障害度に関連なく改善はない。

高齢者で罹病期間の長い頸髄障害では、除圧を含む積極的治療を行ってもしばしば著しい効果が期待できず、これらの状況で保存療法やリハ促進への働きかけとして、OHPを併用した支持療法を、特に中、軽度障害例の療養援助に利用すべきであろう。